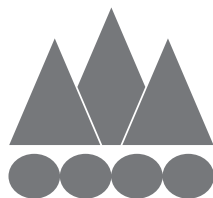
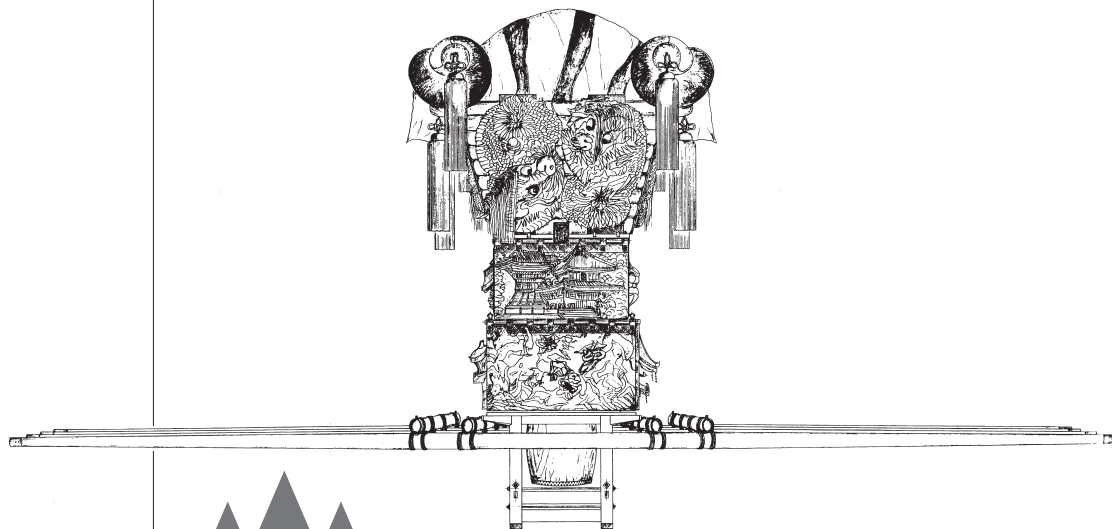


神戸芸術工科大学アジアデザイン研究所準備室〈第一回〉シンポジウム

# 太鼓台は宇宙山



## 1 太鼓台に出会う

[日時]——2009年6月20日(土) 14時—18時

[場所]——神戸芸術工科大学クリエイティブセンター

[主宰]——神戸芸術工科大学

[後援]——神戸新聞社／神戸市／神戸市教育委員会

[シンポジウム講演者]——尾崎明男／齊木崇人／今村文彦／杉浦康平

[司会]——山之内誠

[ポスターデザイン]——準備室—黄国賓／新保韻香



2010年4月開設予定のアジアンデザイン研究所の旗揚げに先立ち、  
研究所の設立とその狙いを広く知っていただくことを意図して、  
今回のシンポジウムが開催された。

## 今日のテーマ「太鼓台は宇宙山」について

司会（山之内誠）—太鼓台とは、瀬戸内海沿岸を中心に分布する、祭りの山車の一種。山車の中で太鼓を打ち鳴らしながら、大勢の町衆に担がれて町を練り歩くもの。

アジアの山車や祭礼との結びつきを考察することで、「アジア圏に共通する神話的造形の  
意味性や象徴性」がみえてくるのではないかと考えている。

こうした観点から、アジアンデザイン研究所の目指すべき方向性を感じていただくのに適  
していると考え、シンポジウムのテーマにした。

●太鼓台のシンポジウムは、今後も連続していく予定。今回は「太鼓台に出会う」というサブ  
テーマをかかげ、太鼓台について詳しくない人にもその姿・形、祭礼の魅力を知っていただく  
ことに主眼をおいている。

●齊木学長、杉浦先生から研究所設立の趣旨などを紹介。

次いで、齊木先生、尾崎先生、今村先生、杉浦先生の順に講演。

**A**—齊木崇人先生…本学学長。

太鼓台の話題に入る前の導入として、最近の研究の成果にもとづき、瀬戸内海沿岸の景  
観の歴史の変遷についてご紹介いただく。

**B**—尾崎明男先生…太鼓台研究の第一人者。

今まで精力的に積み重ねてこられたフィールドワークをもとに、太鼓台の歴史的展開の  
一端を、お話しいただく。

**C**—今村文彦先生…本学ビジュアルデザイン学科の教授で、日本各地の祭礼の研究を  
されていて、文化人類学が専門。

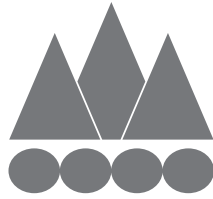
今日は高砂（兵庫）の祭礼についてご紹介いただく。

**D**—杉浦康平先生…本学名誉教授。

今日はアジアの図像研究の視点から、日本各地の様々な山車や、アジアの山車をご紹介  
いただく。

●講演後に、会場からの質疑応答、太鼓台の文化をとりまく現状や課題についてパネラ  
ーに討論してもらう時間をとりたい。最後に、アジアンデザイン研究所設立準備室から  
のメッセージをお伝えして終わりにしたい。

# A 「シーボルトがみた瀬戸内沿海域の 景観が持つ固有価値の再評価」…齋木崇人



ケンペル、シーボルト、朝鮮通信使らが17世紀以後に記録した

瀬戸内の絵図と文章記録を追体験し、時代を超えた海からの眼差しと風景の固有価値を紹介する。

瀬戸内海の祭りとコミュニティー、デザインの伝播、図像文化から、

アジアの宇宙観・自然観を求めて、アジアデザイン学の視点と研究プロセスを仮設する。

●私の専門は、集落・景観、そして街並みの研究である。建築・環境のデザインも数多く行っている。江田島で少年期・思春期をすごした私にとって、瀬戸内海は特別な場所。私の世界観は海とともにある。

[瀬戸内海という場所をどう理解するか]

●公害で汚れ、風景が死に、コミュニティーが崩壊してしまった瀬戸内を「再生する」、「捉え直す」にはどうしたらよいのか。瀬戸内海という「場所」を「どう理解するか」、「どう体験するのか」をテーマに、3年間、研究を続けてきた。一つの方法として、シーボルト、ケンペル、申維翰（シン・ユハン）、リヒトホーフエンらが17世紀以後に記録した、瀬戸内沿岸の調査絵図と文章記録の追体験を行う。神戸から船に乗り、彼らの調査に記された沿岸の港町、集落の現状との比較調査を行った。20トンの船（船長：村上夫妻）に乗り、1週間にわたる旅が5回繰り返された。

[海からのまなざし・多島海を連続してとらえる]

●①—景観、②—土地利用と住居集合、③—営みと生活文化の三つの視点で比較研究を行う。調査ルートは、兵庫津—室津—日比—向日比—鞆—阿伏兔岬—牛ヶ首崎—上関海峡—関門海峡を結ぶ海上の線。

●その結果、

①—数多くの港町、集落がそれぞれの「生活文化の固有性」を保ち、その固有性が、まさに「そこに暮す人びとのためにある」…ということを感じとらせた。

②—「過去に記録された風景」と「現在の景観」を比較することの重要性に気づき、18世紀の調査の際の「海からのまなざし」の新鮮さと、「多島海を連続してとらえる」という重要な視点の再評価に気づかされた。とりわけ、シーボルトが瀬戸内の島々と対峙した姿勢、その見事さに感銘を受けた。

調査の結果、瀬戸内海は今なお美しく、環境全体が息づいている…と感じられた。

③—「外から入り」、「迎えてもらい」、ふたたび「ふりかえって外に向かう」…という風景獲得のための重要なプロセスがあることを、改めて認識した。

●次のステップとしては、「空間を秩序づけ、空間に意味をあたえる」役割をもつ景観や地

# A

点を探しだし、「瀬戸内沿海空間の再構成」を試みてみたい。

## [祭りとコミュニティの研究、図像化への道]

●また、これまでに行った「土地と海域利用の研究」、「持続的居住空間」の研究、「歴史的街並み研究」に加えて、

①—「祭りとコミュニティ」研究に目を向けたい。今回の太鼓台研究は、その一つの核となるもの。さらに、

②—「新しい図像化」研究の試み。たとえば、尾道の浄土寺が所蔵する18世紀の都市絵図に描かれた風景を、現在の景観に再現してみる…という試みや、中国・四国・瀬戸内海の全域を「一つの世界観」で作図してみせた吉田初三郎の絵地図の手法…などに学び、瀬戸内文化を図像化の面から見直すことに挑戦したい。

●こうした方法論を、当大学のアジアデザイン研究所の研究活動にも応用してゆきたいと考えている。

## [アジアデザイン学構築に向けて…、ダイナミックな波動]

●アジアデザイン学構築のための視点を、二つの図にまとめてみた。

第一の図は、大きな三つの主題を核としている。

①は、「日常生活と祭礼」さらに、「デザインの伝播」にかかわる考察。

②は、「伝統と現代」さらに、「象徴性と美意識」への考察。

③は、「アジアの宇宙観、自然観」にかかわる大きな枠組みへの考察。

これら三つの主題を絡ませ、渦巻かせながら、「世界を豊かにし、平和な未来を実現する」ことを目指す。そのために、デザイン文化を継承して発展させよう、よき「人材を育成」する。「未来へ」と向かう、このような視点を提唱する。

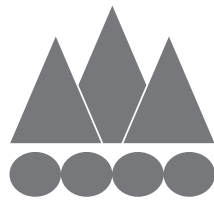
●第二の図は、研究所の研究プロセスを示すもの。

研究所は、二つの研究手法を並行させる。一方は、観察や調査・採集によってつちかわれる「実態へのまなざし」。もう一方は、それを「分析し、考察し、提案に導く」手法。二つの手法は別々に並行しあうのではなく、手法の深まりに応じて、波打つように関係しあう。研究プロセスを辿りつつ、うねり、進み、成長する、一匹の巨大な蛇(宇宙蛇・龍)の姿が浮かびあがる。

私たちは、カオスも呑みつくすダイナミズムをとりこんで、研究を進めたい…と願っている。



## B 「太鼓台に出会う—分布・形態と発展」…尾崎明男



瀬戸内を中心に広く分布している太鼓台の形態には、規模や装飾に大きな差がある。太鼓台が、どのように発展・進行してきたかを、順序立てて論じる。蒲団型太鼓台の「蒲団部」の構造に注目し、今日の豪華な蒲団部となるに至った経緯を、各地の太鼓台との関連を考察しながら、推論していく。

### [太鼓台について]

●今日の話の中心となる太鼓台は、播州や四国の豪華絢爛なものではなく、余り知られていない小型で簡素な太鼓台である。私はこれまでも、太鼓台が、時代を経るごとに発展し形態変化していく様を「一連の流れ」でとらえ、どのように変遷してきたかを、客観的に論じてきた。

●分布状況。瀬戸内の島々や港町に非常に多い一方で、名古屋以東の東日本では、例外を除き全く確認されていない。また、隠岐島・種子島・熊野灘など、瀬戸内から遠い地方にも伝播している。形態・大小・呼称などが異なる太鼓台の体験人口は、優に2300万人に達し、大きな「太鼓台文化圏」となっている。

●各地の太鼓台では、規模・装飾等に余りにも違いがあり過ぎる。従って「全ての太鼓台は、同じ仲間の太鼓台である」ことを明確にしなければ、その後の論議が成り立たない。このことは、これまで欠けていた部分。私は「太鼓台の共通性」に注目し、分かり易い事例を紹介して各地の太鼓台が「仲間の太鼓台である」ことを証し、以降の論を進める。

- ①夜になると蒲団を外す、南予と御手洗の例。
- ②太鼓台を横倒しにする、女木島と種子島の例。
- ③乗り子が後方へ反り返りをする、御坊市と隠岐島と日和佐町と長崎市の例。
- ④このほかにも様々な共通点がある。（「主な太鼓台の共通点(試案)」を参照）

●太鼓台と他の山車等との相違点について。太鼓台では、太鼓の鏡面を水平に保つことと、太鼓を打ち下ろし爆発的な音を発生させることに、重要な意味があるのではないか。ここが、太鼓を斜め積みや横積みする山車などとの根本的な相違点ではないだろうか。

### [太鼓台の形態・発展過程の想定]——尾崎試案

●「太鼓台以前の形態」。まだ、太鼓を積む「櫓組み」は登場しない。舁棒にて移動する以前の形態。神社の据え太鼓や荷い太鼓など。「太鼓台」ではない。

●「ヤグラ」型。乗り子の座部までの形態で、四本柱も無い。ときに笹を四隅に飾る程度のもの。太鼓を垂直に積む櫓組みが登場する。

●「四本柱」型。「ヤグラ」型に四本柱が備わった形態。柱の先端に梵天やシデを飾る場合



# B

もある。

●その上に天井が積まれ、「平天井」型へと進化する。この後、二手に分かれる。

A=「平天井」型から「屋根」型に変化したもの。

- ①—丸屋根型。平天井が、屋根を意識して丸みを持った形態。屋根型の最初。
- ②—切妻破風屋根型。屋根の装飾度合が進展する。分布地は多くなる。
- ③—神輿屋根型。屋根型の最終発達段階。豪華・大型。播州地方が中心。
- ④—その他、寄棟造りの屋根を有するもの。奈良県に多く、小豆島にもある。

B=「蒲団」型。平天井に「蒲団」を乗せたもの。

- ①—本物蒲団型。平天井の上に本物の蒲団を乗せる。薄い蒲団の固定方法は、十字に縛っているだけ。厚みのある蒲団では、固定が難しくなる。
- ②—鉢巻蒲団型。外観は蒲団の積重ねに見える。天部に膨らみを持つものがある。
- ③—杵蒲団型。蒲団部作りの手間を省くため、簡略化された杵蒲団が登場する。この形態になり、太鼓台の大型化が飛躍的に進展したと思われる。
- ④—一体杵蒲団型。蒲団部が分解できない構造。小型の蒲団型太鼓台に多い。

## [蒲団構造の工夫と発展]

●蒲団型太鼓台は、「平天井」型から「本物蒲団」型を経て「鉢巻蒲団」型へと進化し、「鉢巻蒲団」型の中において様々な工夫がなされ、究極の「杵蒲団」型が生み出される。「鉢巻蒲団」から「杵蒲団」への移行の様子を、各地の蒲団部を通じ知ることが、蒲団構造を解明していく上で、とりわけ重要である。

●太鼓台導入当初、船での運搬や翌年までの保管スペースを考慮した場合、できるだけ「持ち運びが良い」ことや「狭いスペース」が好都合であった。蒲団構造発展における工夫の足跡には、太鼓台に携わった先人たちの知恵が詰まっている。

## [太鼓台は、須弥山か…?]

●太鼓台にはさまざまな工夫が加えられ、多彩な形が生みだされた。とりわけ、蒲団の登場。最も初期の太鼓台には、間違いなく蒲団がない。述べてきたように、「全ての太鼓台は仲間同士」である。

しかし、「いつ蒲団が採用されるようになったか」は、不明である。また、太鼓台に「なぜ蒲団を積むのか」についても、雑多な想像はできても、「こうである」との決定的な資料・文献がない。

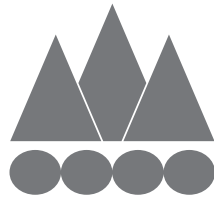
●「太鼓台は、須弥山か。豪華な最終段階に近い太鼓台を見ると、そうとも思う。そうだとすれば、いったい誰が、いつ、須弥山をイメージしたのだろうか。

その反面、太鼓台の変遷を調査し、簡素な太鼓台を多く見てきた私としては、「太鼓台は須弥山だ」…と単純に言い切れないものを感じている。





## C 「祭りの仕組みと太鼓台」…今村文彦



祭りは、一見すると華やかで無秩序に見えるが、背後にはしっかりしたシステムがある。そこには、地域社会の歴史や、固有の世界が反映されている。高砂市曾根天満宮の祭りでは、神人饗応の熱気あふれるドラマ、地域社会の歴史と結びついた祭りを支える仕組みが、蒲団屋台の勇壮な練りを演出している。

◎「祭り」と「社会の仕組み」の関係を調査し、研究している。

一見すると喧噪のただ中にある祭り。だが、背後には、しきたり、規律が潜み、それぞれの地域のアイデンティティが確立されている。

【日常—非日常を結びつける、神人饗応のドラマ】

◎祭りは、人びとがカミを迎え、もてなし、そして送り出す。それはカミと人が共に楽しむ「神人饗応のドラマ」と捉えることができる。このドラマをいかに効果的に演出するか。ドラマの流れの中に日常—非日常、聖—俗、動—静、生—死、明—暗…といった「対立しあうもの（二項対立的なもの）」が出没する。

たとえば、「日常—非日常」。祭りの熱気が、分離した二つの世界を移行し、溶けあわせ、終結を迎えて再びもとの世界へと舞いもどる。「日常—非日常」の位相差が大きければ大きいほど、人びとのエネルギーの爆発を感じとることができる。（→図参照）

◎対立するもののダイナミズムを土台にして、それぞれの地域社会の歴史を埋め込んだ「神話性」が浮かびあがる。依り代、太鼓台…といった装置はそのために必要不可欠なもの。祭りを通して、地域社会を構成する個々人と大宇宙が、豊かな一体化をみせる。

【高砂（曾根天満宮）の祭りを見る】

◎高砂市の西はずれにある、曾根天満宮。10月13、14日に行われる祭礼は、播州の瀬戸内海沿岸で数多く行われる秋祭りの一つである。

高砂をはじめとする付近一帯の浜は、かつては塩田が盛んであった。曾根の町は塩田経営とともに、物資の集散地としても繁栄していた。

祭りには、神輿は出ない。「ヤッサ」と呼ばれる太鼓台（蒲団屋台）が居並び、「一ツ物」と呼ばれる稚児神事が行われる。「竹割り」神事も付随する。

◎「一ツ物」。5、6歳の四人の稚児たちが、肩ぐるまや騎乗で、登殿する。狩衣を着、山鳥の羽を飾る山笠を冠る。額には「八」の字を記す。氏子の代表として重要な神役を務める。

◎「一ツ物」の神事に入る前に、「竹割り神事」が行われる。10メートル余の長さの竹棒を激しく地面に打ちつけ、ぼろぼろにする。このような行事は全国各地に分布するが、地霊を呼び起こし、祓い清める行為と考えることができる。

◎「ヤッサ（太鼓台）」の登場。屋根の上に乗せた蒲団は色彩豊か。四隅が盛りあがる特異

# C

な形。曾根天満宮をめぐる東西南北の町区劃で、四色の色分け。色の配当は、中国の四霊獣の色彩に対応している。

●「一ツ物」「竹割り」「ヤッサ」。三つの神事は、起源を異にし、時代背景を異にするが、曾根の祭礼では、この異質な三つの神事が巧みに接合されている。

## [祭りの仕組み—拘束と逸脱]

●祭りを運営する組織は、セジョモト(世話役)、セワニン(十人衆)、クミガシラ(若い者頭)、ワカイシュ(若い衆)と呼ばれ、年功序列型の構造をもつ。

その一方で若者は、「連中」と呼ばれる組織に加入しないと祭りに参加できない。

●「連中」は、15、6歳になると、何人かで頼りになる人を親分としてつくられる。親分は若者を一人前にする役割を担い、終生この関係が続く。

祭りでは、セジョモトを頂点とする「年功序列のタテワリ関係」と、連中組織による「同世代の若者が生みだす連帯感によるヨコワリ組織」が、巧みなグリッド構造を生みだしている。

このグリッド構造の働きで、日常から解放された若者たちの暴発するエネルギーが親分たちのタテワリの組織によって巧みに収束され、統制される。若者たちのエネルギーによって勇壮なヤッサの練りが生まれるが、それは無秩序に向かうのではなく、タテとヨコの関係の中で好ましいものとして発散される。

●連中組織は、もとは塩田の労働組織であったといわれ、現在まで受け継がれてきた。そこには地域社会の歴史が潜んでいる。

●一見すると華やかで無秩序に見える祭り。だが、背後にはしっかりしたシステムがある。

## [祭りとは何か]

●山車、神輿…といった動的なシンボル。それを中心にして、人が集い、動く。祭りを通して、人・地域の再生が計られる。

●太鼓の響きは、原初的な身体感覚を呼びさます。激しい打音は平坦な日常生活、組織の中の暮らしぶりに、クサビを打ちこむ。カオス的な状況を通して、人びとの活力が目覚めさせられる。

●ヤッサ(太鼓台)の中に、屋根を「富士山」にかたどったものがある。まさに「山」を象徴したもの。山車は山である。だが、なぜ「山」なのか…。

祭礼に熱中している人びとの想いは、理屈をこえている。心の中に沸きたつイメージが伏流水の流れとなり、ある時に突発的に表層化する。

まさに「民俗的想像力」と呼ばれるもの。それが、蒲団屋台の「富士山」の形に結晶している。





# D 「山車のカタチ、アジアの山車」…杉浦康平



「太鼓台に会う」と題する、第一回目のシンポジウム。

そこで、まず最初に山車はカミの「招(お)ぎ代」「依り代」であり、

「山と木を象る風流」であることを紹介し、次いで「日本の山車」を総覧し、

そのあとで、「アジア各地の山車」の代表例を紹介する。

「山車のカタチが意味するもの」の基本編として提示したい。

## 「山車は、山と木を象る風流」

●「山車(ダシ)」という名は「サシダス」「ツキダス」、ものを「出す」…ことに由来する。天にましますカミに向けて、ここに来臨して下さいと願う「招(お)ぎ代」「依り代」となるものを差し出す。それが呼び名になったという(折口説)。

●山車、山鉦、山笠、曳山…。多くの呼び名に、「山」文字が記される。山車は、「山をいただく風流」である。ほかに、屋台、壇尻(楽車)、太鼓台、キリコ、ネプタ…など多彩な呼び名がある。

●「風流」とは、吹く風に似た「気ままな気分」、「自由な気持ち」。その自由さがゆきつくと、人を驚かせるようなものを生みだす。

「自由で、驚きにみちた形をもつ」もの。それが祭礼で曳きだされる山車のカタチ。山車は、「山をいただく風流」である。

## 「標山(しめのやま)を原形とする」

●山車の原形は、京都・御霊会で999年に担ぎ出された「標山を模す造り物」だといわれている。「標山」は、大嘗祭(天皇の即位式)で飾られる一対の造り山。むっくりと立ち上がる造り山の頂上に常緑樹が生い茂り、山麓に男・女の神仙や霊獣が現れる。

不老長生を祈り、福を招く。豊穡の根源をなす造り物(蓬萊に似ている)。祖霊を招く、招ぎ代、依り代となる。「神が標(シメ)た山」、それが標山だ。

●この造り山の飾りものが祭礼の場に曳きだされ、姿・形を進化させると、今日の祇園会(京都)で林立する壮麗な山鉦になる。

## 「中心を貫く心柱。頂上の鉦が悪霊を切り裂く」

●台車の上に飾られた造り山(山籠)と樹木(真松)。傘、人形が周囲に配され、神話・説話が再現される。これが、山車の原型ともいえる「曳山」のカタチ。

「山鉦」は、鋭くとがる山形の山車。一本の柱が中心に聳えたち(真木)、天にとどく。頂上には飾りものがつけられ、神招ぎの印(ダシ)となる。鉦がつけられると(長刀鉦)、御霊会で悪霊を切り裂く武器となる。山と鉦。「山鉦」の名は、これに由来する。

●山車の起源は、車輛の発達に古い歴史をもつ、オリエントにある…と思われる。とり

# D

わけインドでは、今なお、数多くの巨大な山車(ラタと呼ばれる)が祭礼の場で曳きだされる。

インドの山車は、全体が「山」。恐ろしいほどに大きく、聳えたつ。山車の内部は、格子状に並ぶ無数の柱で構成される。まさに「森」。「森」と「木(柱)」、そして「山」の造形が、台車の上に乗っている。神々がすまう山と森を象る——山車の基本となる形である。

## [日本の山車。その代表例を見る]

◎日本各地で作りだされた数多くの山車は、複雑多岐に発達している。代表例は、京都祇園祭の35基(現在数)の山車。山鉦(9)、曳山(24)、舟鉦(1)、笠鉦(1)という4種の型で構成される。

山鉦を代表する「長刀鉦」は、牛頭天王を祀る神社に伝わる「剣鉦の儀礼」を原形とする。鉦は、邪悪なものを封じる力の象徴となる、古代最強の武器である。「笠鉦」は、やすらい祭、葵祭などの花傘の風流と重なりあう。天上界の聖なる力の象徴として、山車にまつわり造形される。「舟鉦」は、海上他界と現世を結ぶもの。祖先霊の送迎を担う山車か。

◎日本各地の山車を、いくつかのキーワードで紹介する。

「ざわめく」山車=岸和田(大阪)の壇尻。「芸能・からくり」の山車=長浜(滋賀)の子供歌舞伎。高山(岐阜)の人形からくり。七尾(能登)のデカ山・日立(茨城)の風流物など。「奇想」の山車=博多(福岡)の山笠、日田、小友(九州)の山笠はともに奇想天外な造形。「燈明・光」の山車=能登のキリコは、キリコ燈籠を原形とする。発展して、巨大な光の山車、能代・青森のネプタ(ネプタ)になる。秋田の竿燈、津島(愛知)の舟鉦。

「造りもの」の山車=唐津、長崎(九州)のおくんち祭の精緻な造りもの。宇和島(南予)の牛鬼(牛頭天王)を象る造りものや、掛川(静岡)の200人で胴体をひろげる大獅子などは、見るものの度肝をぬき、驚かせる。

「山の出現」=四季の山々が突然街中に出現する、鳥山(栃木)の山あげ祭。七年に一度、巨大な造り山(置山)を作りあげる姫路の三つ山祭…など。

◎それぞれの山車、造り山、造りものが意表をつく意匠をこらして、山と木と木偶(人形、聖獣など)が絡みあう華麗な風流を生みだしている。

◎山を街中に出現させる…ということは、人びとが山に対して特別な想いを抱く(たとえば畏怖の念)ことを感じさせる。

では太鼓台はどのような山であり、どのような山車なのか。これからのシンポジウムで、その本質を明らかにしたい。

## [アジアの山車。神々が住まう山を模し、魂を運ぶ]

◎インドの山車。東インド、南インドに数多く現存する。巨大な山車が模倣するのは寺院の形。多くのヒンズー寺院は聖なるヒマラヤ(たとえば、シヴァ神が住むカイルス山など)を模している。山車の内部は、無数の柱が林立している。柱は木立であり、森である。インドの山車は、神々が住む「山」であり、「木(森)」である。

プーリーの山車は、森の神のジャガンナートとその姉弟を乗せた、高さ〇〇メートルのも



# D

の。50万人の巡礼者に見守られる。

●頂上に傘を飾る山車の記録がある（南インド、ケララ州）。傘は、聖なる力をもつもの、天上界の象徴。仏教の仏塔（ストゥーパ）のデザインともかかわりをもつ。

●ネパールには、生木の束を柱状に縛りつけた山車がある。山車は、神を招く柱（梯子、生命樹）。雨乞いの願いをこめる。

●バリ島の山車（パデ）は、メール（須弥山）と呼ばれる寺院を模す。亀蛇が支える土台の上に鳥の翼がひろがり、死者の魂を天界へと運ぶ。

インドネシアの山車は、御輿形。鳥の翼、龍、象などをあしらうものが多い。

●タイ、ミャンマーの山車は龍舟形。死者の霊を他界へ運ぶ。仏陀を乗せ、水上を運行する竜船の山車もある。

●中国では、神仙、曲技師、太鼓を乗せた輿車が画像石や絵図に記録され、天后聖母の祭礼図には、長い柱状の中幡や、曲技奉納の山車が描かれている。

●このように、アジア各地には興味深い山車が林立し、「山」「木」「柱」を模す造形であること、死者の魂を天界に送りとどける乗り物であることを語っている。





# Q 質疑応答



まずはじめに、1985年8月から1988年3月まで134週間にわたる長期間、日刊デイリースポーツ紙に「ザ・祭り 太鼓台のふるさとを行く」と題する長編連載を書きつづけ、太鼓台研究の口火を切られた、成願寺整氏（本名は山崎整氏、現在は神戸新聞社）をお招きしていたので、参加者への紹介があった。

●[質問 ①(宮本英希氏)]——壇尻を研究しています。壇尻があるエリアと、尾崎さんの太鼓台分布エリアがよく重なりあう。なぜ壇尻や太鼓台が、名古屋以西に分布しているのでしょうか…。

[尾崎]——難しいので、その質問は拒否します。(爆笑)

太鼓台は、祭礼奉納物としては他の奉納物よりも後発のものです。太鼓台は勇ましいし、簡素な構造でも成り立つし、維持・運営が容易だという特徴を持つ。各地では、先に登場した壇尻などから太鼓台へ変更されたこともよく聞きます。

名古屋以西の分布については、太鼓台の場合は、瀬戸内の海運が直接的に関係していると思います。船・港町・商人・文化の模倣など、分解して移動可能な太鼓台であったればこそ、より交通の便のよい瀬戸内中心に広まったと考えられます。

●[質問 ②(杉浦)]——ダンジリ、壇尻の由来は？

[岩根 淳氏]——壇は祭壇の壇。尻は、壇にいちばん近いものを指します。神輿に最も近いもの…という意味ではないでしょうか。

●[質問 ③(岩根 淳氏)]——第一の質問。兵庫では、日露戦争で太鼓台の飾りものを没収された。四国ではそのようなことはなかったのでしょうか。第二の質問。多くの山車祭りは藩主の意向に従って流行り、廃れた。太鼓台の場合はどうだったのでしょうか。

[尾崎]——難し過ぎます。この質問も拒否します。

1—明治期、観音寺の太鼓台が善通寺第11師団へ記念遠征として行きました。師団ではそのお礼として、師団旗を太鼓台に贈り物をねぎらったと伝えられています。むしろ近代では、国威高揚の意味からも利用した場合が多く、金属抛出などが行われた場合を除き、飾りものを没収したり規制するということは、なかったのでは…と思います。

2—江戸期の各地の文献などでは、質素儉約を声高に民衆に求めるものがありますが、太鼓台は神事に関する奉納物です。果たしてどれ程の効果があったのでしょうか。したたかな民衆ですので、一時的には為政者側の意に従うことはあっても、結構うまく乗り切っていたのではないのでしょうか…。

[山崎]——規制ばかりではなく逆に、一揆防止のためのガス抜き効果として、為政者が太



Q

太鼓台を利用したことはあるのでは。塩田労働はつらい。大きなフラストレーションの解消にもなったと考えています。

●[質問 ④(杉浦)]——先ほど見せていただいた明治8年の太鼓台は、かなり現在のものに近い。明治初年に、すでに相当豪華になったのでは…

[尾崎]——先生もご存知の通り、私たちが思い描いているよりも、江戸期の職人さんたちは素晴らしいものを残していると思います。おっしゃられる太鼓台は香川県詫間町箱地区に担ぎ出されていたものです。四本柱を上部で固定する桁の部分(分割4枚。現在の各地太鼓台では四角の枠型になっている)の保管箱に、明治8年の年号が記されている。蒲団締も当時使われていたものが現存している。各道具箱も全て揃いで残されている。私は、この太鼓台(地元では屋台と呼称)を、明治初期の「基準太鼓台」と位置づけています。ただ、唐木部分(太鼓台構成の本体部分)は間違いなく明治初期のものですが、刺繍部分については明治41年まで、段階的に補修されています。刺繍の年代の変遷が観察できるという点でも、大きな意義があると思います。現在、香川県立ミュージアムで保存されています。

●[佐藤秀之氏]——山崎さんが太鼓台研究の打ち上げ花火を仕掛けられ、その後各地での研究が深まり、今日はこれだけ多くの太鼓台研究者の集まりになったと思います。深く感謝しています。

●先ほどの岩根さんの質問に関連して。

伊予・西条では、儉約令の記録(金糸肉厚の掛布団をやめるようにとの勧告)が残されています。民衆は、幕ならば問題はなかろうとして、その結果、新居浜の高欄幕が生まれたのではないかと推測もあります。

その一方で、西条には二巻の祭礼絵図(絵巻物)が残っている。江戸上京の際に、たぶん殿様たちのお国自慢の素材となったのではないのでしょうか。

儉約令が出て、民衆には小さな反逆が許されている。そのような反骨心が、太鼓台を今日の姿に育てたのではないのでしょうか…。

## 終わりに

[杉浦]——太鼓台の三文字を掲げただけで、熱心な方々が集まるシンポジウムになった。太鼓台を新しい視点で考えてみようという提案に賛同して下さったことに感謝し、驚いている。尾崎さんはじめ、皆さんが披露して下さる蘊蓄の深さに、これからの研究の深まりを感じている。

●太鼓台は、瀬戸内の方々だけでなく、日本全体にとっての重要な文化財。アジア文化全体にとってのただならぬ文化遺産だと思う。

アジアの人々が太鼓台をどう見るか。インド、インドネシアやタイの人々、あるいはヨーロッパの人たちが太鼓台を見たときの感動を、どう表現するか。それを知りたい。

●今日話題になった太鼓台の歴史、各地の独自性をしっかりと踏まえた上で、より広い太鼓台のイメージを模索する必要がある。皆さんの力を借りながら、神戸芸術工科大学



Q

のアジアンデザイン研究所はその視点をアジアへ、世界へ…とひろげ、今後の研究を深めるシンポジウムを続けてゆきたいと考えている。

[齊木]——大学が地域や社会に対して何ができるのか。私たちの大学は、このことを絶えず念頭におき、研究活動を続けてきた。

◎今日の皆さんの話の中に、すでに一つのうねりが見えはじめた。私の話の末尾で話した「うねる蛇」の図——体験を通して見えないものを見ようとする意志、比較し、融合させ、問題を複合的・重層的にとらえてゆく…という研究プロセスを示す「蛇」の身体が、今日のシンポジウムで、さっそくうねりはじめたと感じている。今回の問題提起を、アジアンデザイン実験の場として共有したい。

◎大学内部での研究・討議に止まらず、私たちは瀬戸内各地をはじめ、アジア各地、あるいはヨーロッパ…と共同討議をひろげてゆきたい。太鼓台をテーマにした移動大学を各地で開き、場所に潜む英知を結集し、幅広くデータベース化してゆきたいと考えている。熱心なご討議、ありがとうございました。

[山之内]——これで終わりにしたいと思います。このシンポジウムは今後も連続するので、今後もご参加いただき、活発なご議論をいただけたら幸いに存じます。ありがとうございました。